

3. 体験を生かした総合学習

— 「手話の世界」を通して —

安達直幸

1. はじめに

「手話」とは明治時代に始まった聾啞者教育の中で、自分たちが自分たちの言葉で語り合おうとするところに存在したことが始まりだとされている。言葉が話すことができない聾啞者の人たちが、何とかコミュニケーションをとろうとした身ぶり手ぶりの集約であるといつてよい。

ところで最近のマスメディアによると、高校生や主婦を中心に「手話」を勉強する人が増えてると報じている。これと並んで、昨年「手話」を取り上げたテレビドラマがいくつか放送されたのは、私たちの記憶に新しい。今、世の中で「手話」がブームになっているのは間違いないであろう。

私たちはその「手話」を学習し、聾啞者の人たちとコミュニケーションをとろうと、聾学校の人たちとの交流会を計画した。

2. 講座のねらい

- (1) 松江聾学校の生徒との交流を通して、障害を持つ人の考え方を知ったり、友達の自分とは違う考え方があることに気づくことができる。
- (2) 手話を学習する。

3. 活動計画・予定

1年生男子8名、女子15名、計23名。これまでに手話を学習したり、実際に使用したことがある生徒は2名。しかし、簡単なものであり、ほとんどできないに等しい。講座選択の理由のほとんどが「耳が聞こえない人達と話してみたい」であり、「家族の誰かに手話ができる人がいるから」が2名、「テレビで見てももしろそうだった」が1名であった。

4. 活動計画の立案とその工夫

(1) 活動計画

ガイダンスや学級でのマナー指導が終わった後、6時間目から訪問計画作りを始めた。聾学校への訪問は、2度にわたり合計5時間を計画した。その後体験のまとめを行い、発表会に備えることにした。18時間目からは体験新聞作りと自己評価の

時間に充てるようにした。

(2) 教師の準備

まずは総合学習についての本校の取り組みを聾学校に説明し、交流会を実施したいという希望を申し出た。そして快く承諾していただいた後、実施時期や内容などについて何度か連絡を取りながら調整し、教師間であらかじめ打ち合わせを行った。概要は次の通りである。

- ・ 生徒が作る交流会にする
- ・ 互いに声をかけあえるようにする
- ・ 生徒同志で事前に話し合いを持つ

(3) 交流会計画作り

交流会に至るまでに、生徒は次のような手順で活動した。

① 交流会案作り

生徒はクラス単位で集まり、どのような内容で交流会を持てばよいのか、案を出し合った。ほとんどがジェスチャーや文字を利用したゲームであり、その具体的方法も合わせて紹介しあい、いくつか案が絞られた。また、仕事を分担し一人一役をこなそうという希望から、開会式担当、ゲーム担当、閉会式担当、用具作り担当の4部門に分け、それぞれが分担された仕事を責任もって行うようにした。

② 代表生徒による電話連絡

1年生の総合学習のねらいの1つである電話のかけかたの実践を、代表生徒にさせることにした。しかし、実際には一人一人が電話をすると仮定して、自分なりの話し方や言葉の使い方を考え、メモ書きをしながら電話の準備を行った。さらにその中で数名を選び、教員を聾学校の先生として電話リハーサルを行った。そして全員で言葉づかいを直したり内容を確認した後、講座代表生徒に聾学校へ電話をするようにさせた。

③ 聾学校代表生徒との事前打ち合わせ

交流会までに聾学校の生徒たちと事前準備会を計画した。物事を決定していく手順を経験させると共に、互いの意見を交わしながら、よりよいものにしていこうというねらいである。また互いの様子を少しでも知っておけば、リラッ

クスして交流会を迎えることができるであろうと、日にちを設定した。4部門の代表生徒はそれぞれが立てた計画をまとめ、意見交換ができるように準備した。

聾学校では、中等部の先生方数名に援助して頂きながら話し合いを進めた。耳の聞こえない人達とどのようにしてコミュニケーションを取れば良いのか、生徒は初めての経験にとまどいは隠せなかった。

手話を学習していない生徒は身ぶり手ぶりを使ったり、大きな口を開けて一語一語はっきりと口を動かして、必死に話をした。聾学校の生徒はとても真剣に言葉を受け取ろうと、じっと話し手の口元に注目していた。先生方の手助けを借り、何とか打ち合わせを終え、互いの考えを知ることができたことで生徒は満足した。「手話しか通じないのでは……」という考えから、「丁寧に話すことで伝わるんだ」ということを生徒は身をもって実感した。

代表生徒には、一人一人が打ち合わせの様子や決定事項、感想もあわせて発表させるようにした。

④ 具体的準備

代表生徒の報告を受けて、4部門での準備を始めた。代表生徒を中心に細かい分担をして、計画を具体的なものへと進めていった。

それぞれの活動の様子は次のようであった。

ア. 開会式

形式的な進行ではあるが、言葉での進行とあわせて文字を使うことで、短時間で能率よく進めるように工夫した。さらに互いを早く知るために自己紹介を取り入れることとし、ゲーム中でも名前がわかるようにと、自分で手作りの名札(住所や趣味、メッセージ等工夫したもの)を準備するようにした。また席順もできるだけ同じ学校同志で並ぶことがないように、自分たちでろう学校の生徒に声をかけ、席は案内する方法をとった。

イ. ゲーム

「フルーツバスケット」を変形させ、「何でもバスケット」とし、今日一日の行動や身につけているものなど、何でも良いという方法にした。これは、自分の行動を振り返ったり、互いを少しでも理解し合おうとするところから考えられたものである。初めは紙とマジックを使って進め、後半には簡単な手話やジェスチャーに切り替えやってみようということになった。

ウ. 閉会式

交流会の感想を両校の生徒数名及び先生方に発表してもらうようにした。また記念品として、手作りのペンダントにメッセージを添え、代表生徒が渡すようにした。最後には全員で記念写真を撮るように計画した。

エ. 用具準備

開閉会式、ゲームの計画を受けて小道具の準備や記念品の作成を行った。交流会の前には出ないものの、後まで残る記念になるものがあるだけに、アイデアを生かした作品を作ろうと、じっくり取り組んだ。記念品には、閉会式で一人一人に手渡そうとの考えから、手作りペンダントにメッセージを書き込んでいた。

5. 交流会の様子

初めに会場準備に取りかかったが、互いを意識してか、数名のグループになってかたまり、積極的に動こうとする生徒は少なかった。かろうじてリーダーたちが指示を出している。はたして、交流会は成功するのであるかと不安がよぎった。予定通りに開会式が始まった。聾学校の先生方に手話をお手伝いして頂きながら代表生徒のあいさつが始まった。続いて自己紹介。趣味や性格を話し始めたころから少しずつ笑いが起こり始め、リラックスしたムードになってきた。ここで生徒がびっくりしたことは、耳が聞こえないために話ができないと思っていたろう学校の生徒たちが、はっきりとは聞き取れないが、大きな声を出し、必死に話をしようとしていたことである。もちろん手話を使っているが、じっくりと聞けばその口の動きも合わせて何を伝えようとしているのかが少しずつわかるようだ。徐々に分かるようになってくると、となり同志で「……って言ったよね」と教えあう光景が見られるようになってきた。おたがいの心が少しずつ近寄ってきたようであった。

いよいよメインの「なんでもバスケット」が始まった。ルール上、自分の座っている席を立ち上がって、素早く空いた席へと移動しなければ座る席がなくなってしまう、鬼にならなければならない。自分の座る席を確保するために、生徒は必死に動き回った。その中で、聾学校の生徒と席を取りあいになっても容赦しないこともあれば、さっと身をおかわして席を譲ったり、他の席へと動く生徒もいた。自然に手や体が触れていく中で、生徒たちはますます盛り上がり、ゲームに熱中していった。中にはとなり同士で名札を見せあったり、あ

いさつをかわすような生徒も見られた。

いくらか時間が過ぎたころを見計らって、リーダーが「手話や身ぶり手ぶりを使ってやってみましょう」と声をかけ、できるかどうか不安ながらもチャレンジしてみるようになった。初めに聾学校の先生をお願いしてやってみてもらうことになり、「〇〇な人」という手話を教えて頂いた。すると初めの数回は何度かやり直しをしながら進んだが、そのうちに何とか身ぶり手ぶりと少しの手話を使いながら、相手に自分の言いたいことが伝わるようになってきた。

終わりの時間になり、閉会式が始まった。生徒や先生の感想が発表された後、記念品が渡され、記念写真を取った。しかし名残惜しいと思いはじめた生徒から、「自己紹介カード」の交換をしようという声があがり、皆が賛成した。一人が交換を始めると、次々に輪が広がり、みんなが交換を始めた。初めはどうしてよいか分からなかった生徒も、帰り際には大きな声で互いにあいさつを交わすようになっていた。生徒は口々に「また交流会したいね」と笑顔で言った。



6. 交流会を終えて

たった一度の機会であったが、聾啞者の人達と実際にふれ合うことで、生活の様子を知ったり考え方に触れることができたことは貴重な経験であった。その中でも、特に生徒が感じたことといえば、

これまでは「聾啞者の人達は自分たちとは何か違う人である」と考えていたことが、「何にも違わない同じ人間なんだ」ということではないだろうか。ある生徒は次のように感想を述べている。「前は障害を持った人のことを、自分とは違う特別な人だと思っていました。だけど交流会を終えてみると、そんな私の考えは間違っていることに気がつきました。聾学校の生徒も私も、勉強や部活動をする同じ人間である。(中略)手話なんか知らなくても、通じあおうという気持ちがあれば心は伝わると思っています。」

このような機会を持つことで、互いの考えを知ることができる。同じ考え方の人もいれば違う人もいるであろうが、その中で自分が考えていたこととは違う考えに出会ったとき、新しい自分に気づくのではないだろうか。

7. 今後の課題

(1) 継続的な交流

今回は総合学習というひとつの学習の場があり、その中で計画した交流会であった。しかし学習していくことに間違いはないが、単発的なものでなく、年間計画の中に位置付けたり、運動会等の行事にも一緒に参加するなど、継続した活動が必要であろう。

(2) 積極的にかかわる場

代表生徒は事前準備会等で意見交換の場があったが、その他の生徒は交流会の場のみであったため、かかわり方としてはやや希薄な感じを受けた。交流会の場を工夫することや回数を増やすことで、全員が意見の交換をしたり、話し合いができる場を設けることが必要ではないだろうか。

また、かかわっていく中で、聾学校の生徒たちから手話を教えてもらえるような場面があれば、更に深い交流となっていくことと思う。

最後に、快く交流会をお受け頂いた松江聾学校の校長先生をはじめ、中等部の先生方に厚くお礼を申し上げたいと思います。

(あだち なおゆき・保健体育科)